

2017年
7月11日
火曜日

社会の変化と人の印象

藤井 和夫 教授（西洋経済史）

二〇一六年の春に留学でポーランドのクラクフ市に滞在しました。この時の留学は楽しいものでした。その理由の一つは、現地の人と日常会話が弾んだことです。半年間とはいえ、久々の長期滞在だったのですが、過去の二回の滞在、一九七八年秋からの二年間、一九九四年春からの一年間と比べて、誰とでもとても

気楽に話せるような気がしました。ポーランド語がうまくなった、という言葉の問題ではありません。とにかく誰が相手でも、話をするときの気持ちが高かったのです。留学中、過去とのこの印象の違いは何なのだろうと気になっていました。

思いついた理由は次のようなものでした。一九七八年の留学時代は、社会主義のポーランドが経済的に非常に苦境に陥っていて、長い行列に並ばなければ生活必需品も買えない

生活と、上から押さえつけられる政治面での圧迫感に、人々は耐えきれない思いをしていました。非合法の官製ではない組合である『連帯』運動が始まっていたころです。政府（警察）との対決や、どこにあるかわからぬ監視の眼に、人々はピリピリしていました。

一九九四年の時は、一九八九年の体制転換の後、まだEUに加盟できる見通しもなく（のちに二〇〇四年に実現）、社会主義計画経済から市場経済への急激な移行の影響で経済システムがガタガタになったまま、国民経済は社会主義時代より後退した状態が続いていました。長い行列に代わって、粗末な小屋が群れあう「バザール」と呼ばれる市場で、何やら怪しげな物も混じる商品を買う人々でこった返していました。そこではちっぽけな、原初的な資本主義

精神が渦を巻いていて、生活に追われる者同士で出し抜かれたりだまされたりと、人々の気持ちに余裕はありませんでした。

失業している人、先の見通しのない人は暗い顔をして、不機嫌です。

相手がどんな境遇の人かわからぬ時に、これらの時期のように、社会の複雑な背景に気を使わねばならないと、話するのはむづかしくなり、気楽に楽しいおしゃべりを楽しむことは無理です。それに比べて、今回、二〇一六年の時は、誰とでも話が弾んだのです。生活が見違えるほど便利で豊かになり、人々の表情も自信と余裕にあふれているようで、街角で知り合った人と「景気はどうですか？」と何の遠慮もいらない会話ができました。お互いに豊かさの格差を意識することなく、同じ「経済の論理」でビジネスの話が成り立っている

たのです。将来の仕事の計画についても、同じ土台で話を分かり合える感覚がありました。ポーランドの社会が変わって次第にわれわれの社会との共通点が多くなり、そのためにポーランドの人々の印象もかつてとはずいぶん変わってきたのだと思います。

ただし、さらに親しくなるとわからないこともあります。EUの恩恵を一番受けてきたはずのポーランドに、なぜ反EUを旗印にする保守政権が誕生したのでしょうか。この点を理解するには、共通する「経済の論理」でこの社会を見るだけでは不十分なようです。やっとなり兼ねなく話のできる関係にはなりませんが、経済の世界しか知らないと、人間、社会の他の部分が見えてこないことを感じます。異なる社会を知るのにはまだ遠い道のりのようです。